

第4講座 物語①

物語

① 物語とは

物語とは、作者が、ある人物や事柄などについて、他人に語る形をとって記述された散文。

② 物語の読み方

物語を読む時には、そのストーリーをとらえながら、そこにおける登場人物の心情に注意する。また、室町時代以降の物語や小説では、その中に教訓的内容が含まれていることもあるので注意する。

③ 物語の分類

作り物語：架空の出来事が、作者の想像によって書かれた物語。

例「竹取物語」

歌物語：物語の話と話の間に、適宜、和歌が挿入され、散文と和歌があいまって内容を構成するもの。例「伊勢物語」

軍記物語：主に源平の合戦など、戦の中での人間の行動と心情が著された物語。例「平家物語」

文学史のまとめ

おもな物語・小説

作品	作者	成立年代	備考
竹取物語	未詳	平安時代	「物語の祖」といわれる
伊勢物語	未詳	平安時代	最初の歌物語
源氏物語	紫式部	平安時代	それまでの文学の集大成
平家物語	未詳	鎌倉時代	軍記物。琵琶法師が語り広めた
伊曾保物語	未詳	江戸時代	仮名草子。「インソップ物語」の訳書
日本永代蔵	井原西鶴	江戸時代	浮世草子。商人の盛衰を描く
東海道中膝栗毛	十返舎一九	江戸時代	滑稽本。江戸・大阪間の道中記
南総里見八犬伝	滝沢馬琴	江戸時代	読本。「勧善懲悪」を貫く長編小説

1 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

田真、田広、田慶、この三人は兄弟なり。親に後れてのち、親の財宝を三つに分けて取れるが、庭前に紫荆樹とて、枝葉栄え、花も咲き乱れたる木一本あり。これをも三つに分けて取るべしとて、^①夜もすがら三人僉議しけるが、夜のすでに明けければ、木を切らんとて、木のもとへ到りければ、昨日まで栄えたる木が、枯れたり。田真これを見て草木心ありて切り分たんと言へるを聞いて枯れたり。まことに人としてこれをわきまへざるべしやとて、分たずして置きたればまた再びもとのごとく栄えたるとなり。

*僉議 Ⅱ 相談。

(「御伽草子」より)

問一 — 線①「夜もすがら」の意味を書け。

問二 にあてはまる言葉として、最も適切なものを次から選べ。

- ア さらでも
- イ にはかに
- ウ いささか
- エ さすがに

問三 — 線②「とて」は、会話を引用したことを示す助詞である。その会話文の冒頭の二字を抜き出して書け。

問四 この文章の内容と一致するものを、次から選べ。

- ア 親が年を取ったので、兄弟は財宝と木を分けようと話し合った。
- イ 草木にも心があるが、兄弟の気持ちをすることはできなかつた。
- ウ 兄弟は、木を分けようとしたが、枯れて価値がないのでやめた。
- エ 兄弟は、木を分けるのは心ないことだと考え、切るのをやめた。

3 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

ある時、夜更けて樋口屋の門をたたきて、酢を買ひにくる人あり。中戸を奥へは幽かに聞こえける。下男目を覚まし、「何程がの」と云ふ。「むつかしながら一文がの」と云ふ。空寝入りして、そののち返事もせねば、ぜひなく帰りぬ。夜明けて亭主は、かの男よび付けて、何の用もなきに「門口三尺ほれ」と云ふ。御意に任せ久三郎、諸肌ぬぎて鍬を取り、堅地に気をつくし、身汗水なして、やうやう掘りける。その深さ三尺といふ時、があるはず、いまだ出ぬか」と云ふ。「小石・貝殻より外に何も見えませぬ」と申す。「それ程にしても銭が一文ない事、よく心得て、

(井原西鶴「日本永代蔵」より)

* 中戸 店と居間を仕切る戸。

* 何程がの どれほどですか。

* 文 通貨の単位。

* 尺 長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。

* 御意に任せ 命令に従って。

問一 線①「むつかしながら」の意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア 苦しいでしょうが
- イ めずらしいでしょうが
- ウ こわいでしょうが
- エ ごめんどうでしょうが

問二 線②「何の用もなきに『門口三尺ほれ』とあるが、だれが、だれの、どういう行為に対してそうさせたのか。「酢」という言葉を用い、三十文字以内で書け。

問三 線③「やうやう」の意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア いろいろ
- イ ゆっくり
- ウ ようやく
- エ かるがる

問四 にあてはまる言葉として最も適切なものを、文章中から一字で抜き出して書け。

問五 にあてはまる文として最も適切なものを次から選べ。

- ア かさねては酢の商も大事にすべし。
- イ かさねては一文商も大事にすべし。
- ウ かさねては夜明けの商も大事にすべし。
- エ かさねては夜明けの商も大事にすべし。

4 次の古文は、能楽で、小鼓を打つことを役目とする権九郎が、名人といわれた父親新九郎の芸域を目指して修行していた若き日の話である。

この文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

権九郎といひし頃、日々鼓を出精しけれども、未だ心に落ちざる折から、年久しく仕へし老姥、朝々茶など持ち来たりて権九郎へ給仕しけるが、ある時申しけるは、主人の鼓もはなはだ上達のよし申しければ、権九郎もをしき事に思ひて、常に鼓は聞けど手馴れし事にもあらず、我が職分の上達を知る訳を尋ね笑ひければ、老姥答へて、「われ、親新九郎鼓を数年聞きけるに、朝々煎じける茶釜へ音ごとに響き聞こえはべる。これまで権九郎鼓はその事なきところ、この四、五日は鼓の音ごとに茶釜へ響きけるゆゑ、さてこそ上達を知りはべる。」と答へけるとなり。年久しく耳馴るれば、自然と微妙によし悪しも分かるものと、権九郎も感じけるとなり。

(根岸鎮衛「耳囊」より)

* 出精しけれども 精を出していたけれども。

* 老姥 年をとった女性。

問一 — 線①「心に落ちざる」の意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア あきらめきれない
- イ 興味がわかない
- ウ 任せられない
- エ 満足できない

問二 — 線②「をかしき事」の意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア 風流なこと
- イ 感心なこと
- ウ 奇妙なこと
- エ 愉快なこと

問三 — 線③「年久しく耳馴るれば」の主語はだれか。文章中から抜き出して書け。

[]

問四 権九郎の「職分の上達」を知った理由を、老姥はどのように述べているか。四十字以内の現代語で書け。

5 次の文章は、「平家物語」の一節で、一の谷の合戦で捕らえられた平重衡が、鎌倉に送られていく途中、自分の境遇について思いめぐらす場面である。これを読んで、あとの各問いに答えよ。

都を出でて、日数経れば、弥生もなけば過ぎ、春もすでに暮れなんとす。遠山の花は残んの雪かと見えて、浦々島々霞みわたり、来し方行く末の事ども思ひつづけたまふに、「さればこれはいかなる宿業のうたてさぞ。」とのたまひて、^①ただつきせぬものは涙なり。

御子の一人も^②おはせぬ事を、母の二位殿も嘆き、北の方大納言典侍殿も本意なきことにして、よろづの神仏に祈り申されけれども、そのしるしなし。「かしこうぞなかりける。子だにあらましかば、いかに心苦しからん。」と

^③のたまひけるこそ、せめての事なれ。

*小夜の中山にかかりたまふにも、^④また越ゆべしともおぼえねば、いとどあはれの数そひて、袂ぞいたくぬれまざる。

*いかなる宿業のうたてさぞ^⑤という前世の報いによるつらさなのだろうか。

*北の方大納言典侍殿^⑥平重衡の奥方。

*本意なきこと^⑦残念なこと。

*かしこうぞなかりける^⑧なくてよかった。

*小夜の中山^⑨現在の静岡県にあった坂道。

問一 — 線①「ただつきせぬものは涙なり」とは、「とめどなく涙が流れる」という意味であるが、これと同じような意味を比喩的に表現している部分を、文章中から抜き出して書け。

[]

問二 — 線②「おはせぬ」を現代かなづかいに直して書け。

[]

問三 — 線③「のたまひける」とあるが、平重衡はどのようなことを言っているか。わかりやすく書け。

[]

問四 — 線④「また越ゆべしともおぼえねば」の口語訳として最も適切なものを次から選べ。

- ア 再び越えるつもりにもなれないので
- イ 再び越えることができると思われないので
- ウ 再び越えなければならぬと思われないので
- エ 再び越えることができないと思われないので

問九 大隅守の性格として不適切なものを次から二つ選べ。

- ア 仕事に關しては厳しい。
- イ 裁判のやり方に自信がない。
- ウ 和歌に關して理解がある。
- エ 融通のきかない性格である。
- オ 柔軟な性格の持ち主である。
- カ 老人に対して思いやりの心がある。

4 次の文章を読んで、あとの各問いに答えよ。

三井寺にわりなく貧しき僧ありけり。念ひわびて思ふやう、「かく所縁のなきなめり。かくしも思ふ事の違ふべきかは。我、外へ行きて宿世をも試みん」と思ひて、昼などは、旅姿もあやしければ、暁出で立つほどに、夜ふかく起き、道の程もわづらはしかるべしとて、しばしよりふしたる夢に、色青み、瘦せおとろへたる、わびしげなる冠者、我と同様に藁ぐつはきなど用意し、いみじう出でたつあり。

さきさきも見えぬ物なれば、あやしくて、「おのれは何者ぞ」と問ふ。「年来候ものなり。いつも離れ奉らぬ身なれば、御伴申し候はんとて出で立ち侍る」と云ふ。僧の云ふやう、「さる物やはある。名をば何と云ふぞ」と問へば、「人々しき身ならねば、異名侍り。ただうち見る人は、貧報の冠者となむ申し侍る」と云ふと見て夢さめぬれば、即ち、身のつたなき宿世を知り、「いづくへ行くとも、此の冠者が添ひたらんには」と思ひて、外心改めて、あやしなから、本の寺にぞ住みける。

これ、又しもあるべき事なれど、人ごとに夢にも見ねば、宿世のほどをも知らず。いくばくもあるまじき身の、あたら、暇に後世の事を聞いて、先づ、もしやもしやと走り求め、心を尽すなるべし。仏天の知見こそ、いと恥づかしくはんべれ。

(「発心集」より)

- * わりなく＝ひどく。
- * 宿世＝前世からの因縁。
- * 冠者＝若者。
- * かく所縁＝こんな貧しい理由。
- * よりふしたる＝横になった。
- * いみじう出でたつ＝くつきりと浮かび上がって。

* 人々しき＝一人前の。

* 貧報＝前世の報いとしての貧乏。

* 外心＝外に向けた心。

* 又しもあるべき事＝ほかの者にもあること。

* いくばくもあるまじき身＝それほど長くもない一生。

* あたら＝もつたいないことに。

* 後世の事＝後世のための仏道修行。

* 仏天の知見＝仏様の見識。

問一 — 線①「道の程もわづらはしかるべしとて」の意味として最も適切なものを次から選べ。

- ア 道中、知っている人に会わないようにと思つて
- イ 長い道のりを行くことを考えると途方に暮れて
- ウ 夜道を行くのも面倒なことだと思つて
- エ もつと近道はないものかという思案して

問二 — 線②「貧報の冠者」の姿形を描写した部分を文章中から二十字前後で探し、初めと終わりの五字を抜き出して書け。

初め

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

 終わり

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問三 — 線③「いづくへ行くとも、此の冠者が添ひたらんには」の後に省略されている言葉を、現代語でわかりやすく書け。

問四 この文章を通して筆者が最も言いたいこととして適切なものを次から選べ。

- ア 貧しいことはこの世のならいなので、貧しいことを恥づかしく思うことはない。
- イ この世でもつとよい生活があるのではないかと思つて心を悩ますよりも、後世のための仏道修行にいそしみなさい。
- ウ 前世の報いをまったくわからない人が多い中で、夢でそれを知ることができた人は幸いなことだ。
- エ この世の貧しさから逃れたいと思つるのであれば、自分の力に頼るのではなくて、仏様の見識に依り頼みなさい。

解答

〈MJサテライト 古文〉

第1講座 古文の知識

○歴史のかなづかい

- 1 (1) おおかみ (2) いわう (3) かえる (4) こおり
 (5) うぐいす (6) こいねがう
- 2 (1) こうし(格子) (2) ばしょう(芭蕉)
 (3) しゅうとめ(姑) (4) きょう(今日)
 (5) こうみょう(高名) (6) きちようめん(几帳面)
 (7) にゅうどう(入道) (8) ちようし(調子)
- 3 (1) がいじん(外人) (2) だいかん(代官)
 (3) こうみょう(光明) (4) かちよう(花鳥)
 (5) かんとう(関東) (6) がん(願)
- 4 (1) まいる(参る) (2) えんりよ(遠慮)
 (3) こずえ(梢) (4) くれなひ(紅)
 (5) いろり(囲炉裏) (6) こえ(声)
- 5 (1) おじ(伯父・叔父) (2) おかし
 (3) わづらい(煩い) (4) もみじ(紅葉)
 (5) いずこ(何処) (6) おこがまし(痴がまし)
- 〔解説〕 現代かなづかいでは「ぢ・づ・を」を用いる場合は限られている。

○重要古語

- 1 (1) かわいらしいもの(は) (2) 趣がある(風情がある)
 (3) かわいい (4) みごとに (5) 心ざびしい(から)
- 〔解説〕 (1) 現代語の「美しい・きれいな」と区別する。
 (2) 現代語の「可笑^{おか}しい」「不審だ」と区別する。
 (3) 切ないほど「かわいい」の意味。
 (4) 現代語では、「喜ぶべきことだ」という意味が強いのので注意。
 (5) 現代語の「にぎやかだ・うるさい」という意味では、前後の文脈がつかない。
- 2 (1) だんだんと(次第に) (2) たいそうかわいらしく
 (3) おおぜい (4) たいそう趣がある(とても風情がある)
 (5) とても残念だ (6) 出発できない
 (7) ますます (8) まったくそのききめがない
- 〔解説〕 (1) 「やうやう」は読み方も重要。
 (4) 「いみじ」は、程度のはげしさを表す。
 (6) 「え……ず」(……できない)とセットで使う打ち消し表現。「な……そ」(……してはいけない)も同じ使い方。
 (7) 「いといと」が転じた語。「いと」よりも強い表現。
 (8) 「さらに……なし」で強い打ち消し表現。
- 3 (1) ① イ ② イ (2) ア
- 〔解説〕 (1) ①「あはれなり」は「をかし」と並ぶ重要古語で、代表的な多義語でもある。「しみじみと心を打つようす・情趣が深いようす・すてきだ・気の毒だ・りっぱだ」などの意味がある。
 (2) 「おぼつかなし」の現代語の意味は「気がかりだ・心配だ」の方に近い。